

Title	藤原定家の百首歌とその系譜
Author(s)	細川, 知佐子
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/49090
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	ほそ かわ ち さ こ 細 川 知 佐 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 2 1 6 8 7 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	藤原定家の百首歌とその系譜
論文審査委員	(主査) 准教授 加藤 洋介 (副査) 教授 飯倉 洋一 教授 荒木 浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、鎌倉時代の歌人である藤原定家の百首歌ならびに秀歌撰を考察の対象とし、主としてその構成配列を分析することによって、定家の百首歌構築ならびに秀歌撰編纂の方法、また百首歌と秀歌撰相互の連関性を明らかにしようとするものである。(400字詰原稿用紙換算約 550 枚)

前編では、定家の百首歌構築の手法を解明するため、百題百首の組題から構成される百首歌ではなく、「春」「夏」「秋」「冬」「恋」「雑」という構成から成る部立百首について、その構成と歌語の用法からの解明を試みる。第一章では、定家の「初学百首」への影響が指摘されている、定家の父俊成の『久安百首』について、藤原顕輔や同時代歌人との比較から、俊成が歌材の取捨選択や構成配列において顕著な独自性を発揮していることを指摘する。このことを受けて、定家は初めて挑んだ百首歌である「初学百首」において、父俊成の『久安百首』の構成を手本として受容しつつ、さらに定家独自の自由な裁量を発揮しているとする。さらに「初学百首」以降に詠まれた七回の部立百首を分析し、定家は「初学百首」以降もその構成の基本形を生涯大きく変更することがなく、また定家自撰の自歌合である『定家卿百番自歌合』の構成配列とも相似していることを指摘する。第二章は定家の百首歌に詠まれた「有明」という歌語を取り上げる。「有明」の語には明け方に空に残る月(一日意識の「有明」)と下旬の月(月齢意識の「有明」)の二つの用法があり、定家は部立百首において月齢意識をもって月の歌群の最後に「有明」を用いていることを、組題百首や同時代歌人、定家以前の百首歌など幅広く調査した上で、定家の独自性として指摘する。また定家は百首歌恋部において季節の推移と恋の進行とを融合させているという「恋」の四季配列を指摘し、その際に参考とされた『古今集』「恋四」の和歌に関する定家の解釈を手懸かりに、定家の「閑居百首」に詠まれた「有明」の語を含む恋歌一首について新解釈を提示する。

後編は、定家自撰の自歌合『定家卿百番自歌合』と、『古今集』から『新古今集』までの八代集から定家が歌を選び構成配列した『定家八代抄』という二つの秀歌撰について、百首歌と同様に主として結番や配列構成といった点からの分析を試みる。第一章では『定家卿百番自歌合』の二次本から三次本への改訂箇所を取り上げ、定家による改訂の時期とその意図を探る。第二章では、従来再撰本へ到る前の未整備な草稿本であるとされてきた初撰本『定家八代抄』について、初撰本収載歌と定家の建保期百首歌との密接な関係を指摘し、初撰本編纂時の定家の意図は再撰本とは異なるところにあったものと推測する。また勅撰集恋部の四季配列との比較から、『定家八代抄』の四季配列の独自性および定家の息為家の撰になる『続後撰集』への影響の可能性を指摘する。

論文審査の結果の要旨

歌人としての藤原定家の業績については、歴大な先行研究の蓄積がある。それらの多くが和歌一首一首の分析からそれを定家の詠歌史に位置づけようとするのに対し、本論文が百首歌や秀歌撰の構成配列を分析し、そこから定家の営為の意義を見出そうとするのは、和歌の詠作のみならず、勅撰集をはじめとする様々な編纂行為による業績を持つ定家の一面を明らかにするのに有効な方法である。部立内部の構成が歌人の自由な裁量に任されている部立形式の百首歌を取り上げ、これまでに指摘されている個別和歌レベルでの影響ばかりでなく、父俊成の『久安百首』からは部立内の構成配列の点においても強く影響を受けていることを明らかにしている。さらに通時的に定家の部立百首の展開を確認し、定家が初めて挑んだ百首歌である「初学百首」の構成を基本形とし、それを生涯大きく変更することはなかった事実を提示する。またこれら定家の百首歌に関する分析の過程で、『定家卿百番自歌合』や『定家八代抄』といった編纂行為による著作との共通点を指摘していることも研究史上有意義である。これまで草稿段階のものとしていた初撰本『定家八代抄』について、同時期の歌壇状況の分析を通して定家詠作との密接な関連を指摘し、再撰本『定家八代抄』とは異なる編纂目的を示したことも説得力を有しており、高く評価することができる。定家の息為家の単独撰になる『続後撰集』と『定家八代抄』との共通性についても、為家による受容という点で注目すべき指摘である。

他方、この百首歌における構成配列の問題が、実際の詠作の場や周囲からの評価とどのように関わるのか不明な点が多い。『定家卿百番自歌合』改訂の時期や目的に関する分析についても、その結論は妥当であると思われるものの、分析の対象とする改訂された和歌が百番二百首のうちわずか十首にすぎず、定家の意図を探るというにはやや心許ないものがある。為家による『定家八代抄』受容に関する問題については、さらに広範な視点からの検討が必要である。

以上のような問題点を含むものの、本論文が藤原定家の部立百首における構成配列の分析ならびに秀歌撰をめぐる諸問題の解明を通して提示したことは、研究史的にも高く評価できることと思われる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。